

文 法——活用語

田村 すゞ子

私がアイヌ語の文法を研究していると言うと、「へえ、アイヌ語にも文法なんてあるんですか?」とびっくりなさるかたがありますが、およそ人間の言語と名のつくものはすべて文法を持っています。ホッテントット語であろうと、エスキモー語であろうと、英語やフランス語であろうと、日本語であろうと、みなそれぞれの文法があります。では、文法とは一体何でしょうか。

言語にはいろいろな面の構造があります。たとえば「きょうは暑いですね。」と言った場合、話し手の肺が何かの働きをし、声門も動き、あごや舌や唇なども動きます。そうして発せられたオトが空気を伝わって聞き手の耳にはいります。こういった言語のオトの面にも、構造があります。「暑い」ということばには、a, ts, u, iなどの音が含まれており、ts と u とは「ツ」という一つの音節を作っています。また、「暑い」と「厚い」とを比べると、「アクセント」のちがいが見られます。これらはすべて、オトの面の構造の問題です。次に、「きょうは 暑いですね。」「きょうは 涼しいですね。」「きょうは 寒いですね。」などを比較してみると、「暑い」「涼しい」「寒い」という語の間には、意味の関係が認められます。「暑い」の反対は「寒い」であるとか「涼しい」であるとか言われます。こういった、ことばの意味も、構造を持っています。ところで、もう一つの面の構造があります。「きょうは 暑いですね。」「きょうは 寒いですね。」と言えますし、「きょうは 雨ですね。」とも、「きょうは 暖かですね。」とも言えますが、「きょうは 晴れるですね。」「きょうは 雨が降っているですね。」などとは言えません。つまり「...です(ね)」の前に、「暑い」「寒い」「雨」「暖か」などははいること

ができるけれども、「晴れる」「雨が降っている」などははいることができない、というきまった習慣が、現代日本語 東京方言にはあります。また、「とても暑い」「とても寒い」は言えますが、「とても雨」「とても晴れる」などは言えません。つまり、「とても」のあとに「暑い」「寒い」などははいることができるが「雨」「晴れる」などははいることができない、という規則性があります。また「本を買った」「本を見た」「本を読んだ」と言えますが「本を大きい」「本を厚い」「本をある」などとは言えません。つまり、「本を」のあとに、「買った」「見た」「読んだ」などははいることができるけれども、「大きい」「厚い」「ある」などははいることができない、という規則性があります。このような、文を構成する語と語の結びつきの規則性を「文法」というのです。

〔I〕 日本語教育における文法の意義

では日本語を学習者に教える場合には、「文法」をどうとり扱ったらよいでしょうか。よく、「文法を教えても意味がない。日本語が機械的に使えるようにドリル—訓練—をすればよいのだ。」と言う人があります。これは、「文法」ということばを、ごく狭い意味に使っているのです。日本語が機械的に使えるようにドリルをすることは大切なことですが、その場合に、発音や意味だけ教えればよいというわけではなく、やはり文法を教える必要があります。もちろんこれは、「コ、キ、クル、クル、クレ、コイ」などの活用形を教えたり、「動詞とは何ぞや」「中止法とは」といったような定義を教えたり、「セル・サセル、レル・ラレル、ナイ・ヌ・ン、ウ・ヨウ…」などを丸暗記させたりすることではありません。そんな理論は教えても何にもなりません。しかし、「暑いですね」「雨ですね」と言うけれども「晴れるですね」と言わないで「晴れますね」と言う、というような、語の結びつきの規則性は、学習者にしっかりと身につけさせなければなりません。

原則 1 「理論や学説を教えるのではなく、日本語そのものを教える」
ということが大切です。しかし、日本語そのものを教えるといっても、た

だめちやくちやに会話の練習をしていけばいいというわけではなく、短時間に効果的に教えるためには、文法に基づいた体系的な指導が必要です。これは現場の教師よりも、テキスト編纂者に注文すべきことかもしれません。しかし、私たち教師がそういうテキストを使って教える場合にも、そのテキストの体系を理解して、それに従って教えることが必要です。たとえば木村先生の「入門期の教材と扱い方」の中でお話があったように、あるテキストでは「...をください」と「...してください」とを同じ課で扱い、他のテキストでは別の課で扱っています。別々に教えるように編まれたテキストを使うなら、「...してください」を教えるときに、まだ教えてない「...をください」をいっしょに教えてしまう必要はないし、もちろん「ください」は「くださる」の命令形だとか、「くださる」の活用はふつうの動詞とちょっとちがう点がある、等々にふれることは、まったくよけないことでしょう。また、いっしょに教えるように編まれたテキストを使う場合にも、「...をください」があるからといって、「...をくれました」とか「あげる」とか「やる」「もらう」「いただく」等々をついでに教えてしまう、というようなことは、よくありません。ただ「パン」の場合には「パンをください」「窓をあける」の場合には「窓をあけてください」という、ということ、練習によって身につけさせればよいのです。

国文法の本の活用表を見ると、終止形と連体形が区別して書かれています。先日、中学校の国語の先生方の集まりで、ある先生が、動詞や形容詞の終止形と連体形の区別を、中学生に理解させるのが、非常にむずかしい、ということを言われ、ほかの先生方も同感だと言っておられました。私はその先生方がお気の毒になりました。日本人の中学生に教える場合は、何かの理由でこういうむだな苦勞が必要なのかもしれません。外国人に日本語を教える場合には、こんなことはまったく無意味です。学者の中にも、終止形と連体形を区別しない人がたくさんいます。たとえこの二つの活用形を区別して立てるとしても、「書く」という動詞は文末(終止形)でも「書く」だし、「とき」「人」などの前(連体形)でも「書く」で、同じ形が

用いられる、ということは確かです。そういうことだけを教えればいいのです。

国文法の理論を教えるのではない、と申しましたが、だからといって、日本語の文法を外国語によって説明してよいというわけでは決してありません。

原則 2 「日本語は日本語自体の構造を持っている」

ということは、非常に重要なことです。たとえば、「...でしょう」という表現があります。「でしょう」は、「あの人はあした銀座へ行くでしょう。」のように「行く」のあとにも、「あの人はきのう銀座へ行ったでしょう。」のように「行った」のあとにもつきます。ところが、「行くでしょう」の「でしょう」は will で、「行ったでしょう」の「でしょう」は probably だから、この二つの「でしょう」は別のことばだ、と言った人があります。この人は、日本語の二つの「でしょう」を比べているのではなくて、英語の二つの訳語(この訳語の当否はともかくとして)を比べているのです。英語を離れて日本語だけを見れば、「行くでしょう」の「でしょう」と「行ったでしょう」の「でしょう」とは同じです。日本語の文法を日本語自体の文法としてとらえなければ、正しい日本語教育はできません。

原則 3 「現代語は現代語自体の構造を持っている」

ということも大切なことです。たとえば、国文法の本を見ると、助動詞のところ(本によっては動詞の派生のところ)に、「れる・られる」というのが出ています(飲まれる、食べられるなど)。その用法の一つに、「可能」というのが書いてあります。一方動詞のところに「可能動詞」として、「飲める」「書ける」「話せる」等々が出ています。そこである人が、「食べられる」(can eat) といっしょに教えるべきものは「飲まれる」(can drink) であって、「飲める」は文法としてではなく、語彙としてとり扱うべきである、ということを行いました。またそういう教育を受けて来た学生に、「飲まれる」「話される」等が正しくて、「飲める」「話せる」などは文法に合わないのじゃないかと言われて閉口したこともあります。しかし、昔、文語

のいわゆる「る」と「らる」が並行して使われたとしても、文語から離れて現代口語だけを見るならば、「おなかをこわしているから、ごはんも食べられないし、お酒も飲めない。」のように用いられるのですから、「食べる」——「食べられる」に対して「飲む」——「飲める」をとりあげなければなりません。もっとも、「お酒も飲めない」のような言い方もないわけではありませんから、これをまちがいだとしてしまうことはできませんが。なお、このごろ若い人たちのことばを聞いていると、「食べれる」「見れる」のような言い方も、よく使われています。私自身はこういう言い方をしませんし、聞くとちょっとへんな感じがします。そしてそういう人がかなり多いようです。ですから、今この形をふつうの外国人に教えることは適当でないかもしれません。しかし、仮にあと何年かあるいは何十年かたって、大部分の人が「食べられる」「見られる」ではなく「食べれる」「見れる」を使うようになったとしたら、その時には、これを教えなければなりません。ことばは時とともに変化しています。“昔のことば=正しいことば”と考えるのはまちがいで、現代語を教える場合には現代語自体の文法（つまり習慣）を教えなければなりません。

〔II〕 日本語文法のいろいろな学説

日本語（現代東京方言）の文法そのものは一つでも、それを記述するにはいろいろな方法があります。まず、日本における伝統的な文法——国文法——の本を見ると、日本語が（漢字と）かなで書き表わされ、そのかなの並び方によって記述が行なわれています。表 1, 2 はその一つで、これはある中学校の国語の教科書（柳田国男・成瀬正勝編「新しい国語」東京書籍）のうしろについている表です。国文法にもいろいろな説があり、こまかい点でちがうところはありますが、大まかなところは同じです。活用語においては、「未然形」「連用形」…「命令形」というような「活用形」を立てています。動詞を例にとれば、活用の種類を「五段（または四段）活用」「上一段活用」「下一段活用」「カ行変格活用」「サ行変格活用」の五つに分

けています。五段活用の動詞、たとえば「書く」の語幹は「か」(書), 語尾は「こ」「か」「き」「く」「け」となっています。これに対し、日本語をローマ字表記(または音素表記)することによって、かなでは表わせない点も明らかにしようとする人があります。Bernard Bloch はその一人で、表 3 は JAOS という雑誌にのった彼の日本語文法の論文の中の活用表です。「書く」「書け」は、かな書きの国文法では上述のように「か」(書)(語幹)と「く」「け」(語尾)に分けられ、「書こう」は「か」(書)(語幹)と「こ」(語尾)と「う」(助動詞)に分けられていますが、ローマ字で書いた Bloch やそのほかの人々の記述では、ふつう「kak-」(語幹)と「-u」「-e」「-oo」(語尾)に分けられています。この種の記述も、一通りではなく、人によっていろいろちがいます。表 4, 5 は私が考える動詞の活用表です。

ローマ字(音素記号)によって文法を記述する人たちの中で、最近 transformation (展成文法, 変形文法などと訳します) の考え方が出て来ました。たとえば、「太郎が花子をなぐった。」という文と「花子は太郎になぐられた。」という文は、無関係ではありません。この関係に目をつけて、これを文法の記述に使おうというのです。教える場合にも、この考え方はたいそう役に立ちます。

さて、このように、同じ現代語の文法を記述するのに、実にいろいろちがった学説がありますが、どれが正しいか、いちばんいいか、ということ、今決めることはできません。また決める必要もありません。さきほどの原則 1 によって「書く」「書け」「書こう」などの、それぞれの用法をしっかりと教えればいいのです。「食べる」「書く」の終止形、連体形、あるいは Indicative が「食べる」「書く」だ、ということよりも、こういう場合には「食べる」「書く」が用いられるのだ、ということをお教えることです。

原則 4 「形だけを教えても意味がない。用法を身につけさせるように」ということも大切なことです。

〔III〕 日本語教師が常識として持つべき日本語文法の知識

1. 品詞

単語は、その用いられ方によっていくつかの種類(品詞)に分けられます。たとえば「本を買った」「バナナを買った」「うちを買った」「本がある」「バナナがある」「うちがある」のように言えるので、「本」「バナナ」「うち」は同じ種類のことばだと言えます。また「本を買った」「本を読んだ」「本を借りた」などから、「買った」「読んだ」「借りた」は同じ種類のことばだと言えます。このようにして、いくつかの品詞が立てられます。文法書によって多少ちがいますが、伝統的な国文法の本を見ると、大体、表1にあるような、十ぐらいの品詞が立てられています。この中でよく問題にされるものの一つが「形容動詞」です。「形容動詞」は「形容詞」の一種だという人もあれば「名詞」と同様に「体言」の一種だという人もあります。しかし、いずれにせよ、「きれい」「しずか」「りっぱ」などのことばが、「大きい」「かわいい」「おもしろい」など(形容詞)とも、「学生」「本」「大学」など(名詞)ともちがう、ということは確かです。

2. 文の述部

ここで文の述部をちょっと見てみましょう。デス・マス体の文の文末には「——マス」「——マセン」の類と、「——デス」「——アリマセン」の類とあります。「——マス」「——マセン」の類のつくものは「動詞」と呼ばれています。「——デス」「——アリマセン」のつくもののうちには「——イデス」「——クアリマセン」のものと「——デス」「——デハ(またはジャ)アリマセン」のものとあります。「大きい」「かわいい」「おもしろい」など(形容詞)は前者で、「学生」「本」「大学」など(名詞)は後者です、そして「形容動詞」と言われる「きれい」「しずか」「りっぱ」なども後者です。このように、形容動詞は形容詞とはちがっており、この点では名詞と同じです。しかし一方、「きれいな人」と言いますが「学生の人」と言います。「とてもかわいい」「とてもきれい」と言いますが「とても学生」と

は言いません。このように形容動詞は名詞ともちがっており、形容詞と共通の性質も持っています。「きれい」「しずか」などを英語に訳すと形容詞になるからといって、これらを「大きい」「かわいい」などと同じ種類のことばだと言うのもまちがいなら、「きれいだ」「きれいじゃありません」などというのが名詞と同様だからといって、これらを「学生」「本」などと同じ種類のことばだと言うのもまちがいです。教えなければならないのは「大きくない」と言うが「しずかでは(またはじゃ)ない」と言い、「大きい人」「きれいな人」「学生の人」のように、使い方がちがう、ということです。

こういう用法のちがいを教える場合には、

原則 5 「同じ種類のものをいっしょに教え、ちがった種類のものを別に教える」

ということが、教えるテクニックとして重要なことのように思われます。「大きくない」「かわいくない」「おもしろくない」のように、「...くない」の表現は「...くない」の表現でまとめて教え、「きれいじゃない」「しずかじゃない」「学生じゃない」「本じゃない」のように、「...じゃない」の表現は「...じゃない」の表現でまとめて教える、そうしてそれぞれを十分練習させて、もう大丈夫だという状態になってから、両者をまぜて選ぶ練習をさせる、また「きれいな人」「りっぱな人」のように「...な」の表現、「学生の人」「医者の人」のように「...の」のつく表現、「大きい人」「かわいい人」のように何もつかない表現を、それぞれ別々に練習させてから、あとでまぜる、ということが原則でしょう。

3. 活用

さて、次に活用の問題にはいりましょう。活用語にもいろいろありますが、まず動詞をとりあげてみましょう。先に申しましたように、国文法の本を見ると、動詞の活用には「五段」「上一段」「下一段」「カ変」「サ変」の五種類があると書いてあるのがふつうです。これをもっと整理して言うと、動詞は

(1) tabe-ru (食べる), oki-ru (起きる) のように、語幹 (国文法の方

でいう「語幹」とはちょっとちがいますが) が e または i という母音で終わるもの

(2) kak-u (書く), nom-u (飲む) のように、語幹が子音で終わるものの二つに大別され、そのほかに

(3) 不規則なもの(来る, ...来る, する, ...する)があります。

(1) と (2) とは、いろいろな活用形において、ちがった語尾をとりますし、派生語を作る場合にも、ちがった接尾辞をとります。(1) には -ru (食べる), -yoo (食べよう), -ro (食べろ), -reba (食べれば) などがつき、(2) には -u (書く), -oo (書こう), -e (書け), -eba (書けば) などがつきます。先ほどの可能の表現について言えば、(1) の動詞には -rare- がついて *taberare-* が一つの動詞(食べられる)の語幹となりますし、(2) の動詞には -e- がついて *nome-* が一つの動詞(飲む)の語幹となります。念のため申しますが、学習者にはこういう理屈をナマで教えるわけではありません。もちろん、伝統的な国文法の本に書いてあるような理屈を教えるわけでもありません。-yoo, -oo の活用形を例にとると、国文法の本では「う・よう」は未然形につくと書かれ、「食べる」の未然形は「食べ」で、これに「よう」がつく、「飲む」の未然形には「飲も」と「飲ま」とあって、「う」は「飲も」のほうにつく云々、ということになっています。しかしこんなことは、日本語教育にはぜんぜん関係のないことです。日本語教育に必要なことは、「食べよう」「起きよう」と言うけれども、「飲むよう」とか「飲みよう」とか言わず、「飲もう」という、ということです。これが自由に使えるように、学習者を導いてあげることが大切なのです。

さらにアクセントを考えに入れるならば, *tabé-ru* (食べる), *okí-ru* (起きる), *kák-u* (書く), *nóm-u* (飲む) のように、終止形の語幹にアクセント(専門語で言うと「アクセント核」)があるものと, *ake-ru* (開ける), *ki-ru* (着る), *kas-u* (貸す), *tob-u* (飛ぶ) のように、終止形の語幹にアクセ

ントがないものとの二種類に分けられます。この種類によって、表5のように、いろいろの活用形や派生語でアクセントが互いにちがっており、それぞれの種類の中ではそれが一定しています。たとえば tabéru (食^レべる), tábeta (食^レべた), tabénai (食^レべない), tabesaséru (食^レべさせる) ですが, akeru (あ^レける), aketa (あ^レけた), akenai (あ^レけない), akesaseru (あ^レけさせる) のようになっています。日本語の先生方の中には、日本語においてアクセントは大して重要ではないから、学習者にアクセントを教える必要はない、とおっしゃる方もあります。アクセントを教えないならば、上のようなことは必要ありませんが、もしアクセントまでも教えようとするならば、このように活用語をアクセントによって分けて教えるということも、有効です。その場合には、先の原則5が役に立つでしょう。つまり、「食^レべる」「起^レきる」などと、「あ^レける」「ね^レる」など、「食^レべた」「起^レきた」などと「あ^レけた」「ね^レた」などとは、まず別々に教え、それぞれがすっかりできてからあとでまぜることです。ただし、活用形や派生語によっては、この二種類の区別のないものもあります。たとえば、「食^レべよう」「起^レきよう」などと「あ^レけよう」「ね^レよう」などとは、(文末に用いられているかぎり)区別がありません。「食^レべます」「起^レきます」「あ^レけます」「ね^レます」などの「…ます」の形も同様です。このように、区別がないものは、もちろんいっしょに扱ってよいのです。

次に形容詞をとりあげてみましょう。形容詞には活用の種類があるでしょうか。“ク活用”と“シク活用”がある、「大きい」は「ク活用」で「美しい」は「シク活用」だ”と言う人があります。“だから、「ク活用」と「シク活用」とは分けて教えるべきである”と、ある先生が言われました。実はこの区別は文語の形容詞の区別なのです。現代語には形容詞のこういった区別はないのです。原則3をもう一度思い出してください。「現代語は現代語自体の構造を持っている」——これはとても大切なことです。

さて、形容詞には、動詞に見られたような活用の種類はありませんが、アクセントを考慮に入れると、ここでも、終止形の語幹にアクセント(専門語

で言う「アクセント核」があるものとなないものとの二種類に分けられます。そして、その種類によって、いろいろな活用形や派生語などのアクセントがちがってきます。[たとえば, wakái (わか^い) [若い] と akai (あ^かい) [赤い] を比べると, wákakatta (わか^かった), wákaku (わか^く), wákakereba (わか^ければ), wákasa (わか^さ), akákatta (あか^かった), akaku (あか^く), akákereba (あか^ければ), akasa (あか^さ) のように, アクセントがちがいます。もし学習者にアクセントまでも教えるのならば, このように, アクセントによって形容詞を二種類に分けて教えることも効果的でしょう。

[IV] 文法教育上の五つの原則

いろいろとまとまりのないお話をいたしました, 日本語の文法を教える場合の五つの原則を, もう一度あげてみましょう。

1. 理論や学説を教えるのではなく, 日本語そのものを教える。

これは文法教育の意義として重要です。

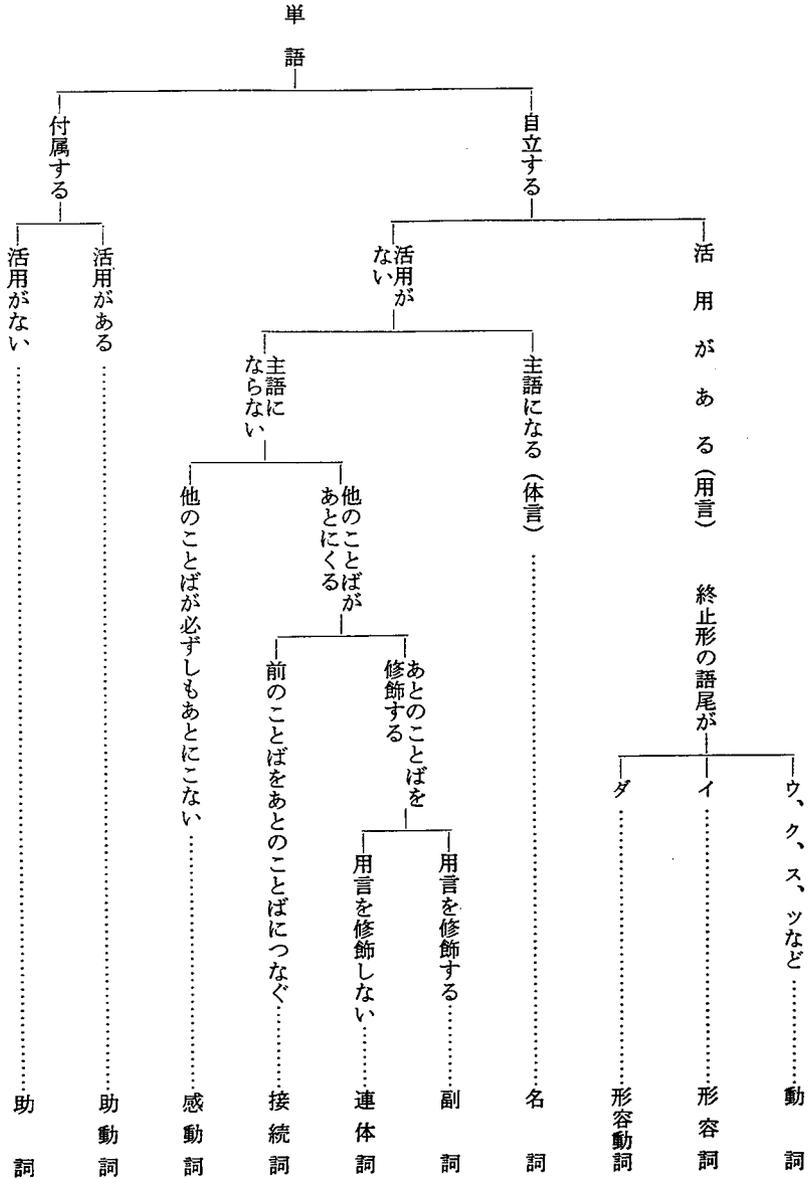
2. 日本語は日本語自体の構造を持っている。
3. 現代語は現代語自体の構造を持っている。

この二つは, あらゆる言語の研究者, 学習者, 教育者にとって, 基本的な, とても大切なことです。文法ばかりでなく, 発音や語彙をとり扱う場合にも忘れてはならないことです。

4. 形だけを教えても意味がない。用法を身につけさせるように。
5. 同じ種類のものをいっしょに教え, ちがった種類のものを別に教える。

この二つは, つけ足しですが, 教える際のテクニックとして重要です。

(表 1)



(表 3)

Bernard Bloch: Studies in Colloquial Japanese I; Inflection

	Vowel Verbs	Consonant Verbs	Adjectives	Plain Copula	Polite Copula
Ind	-ru	-u	-i	S	-u
Pve	-yoo	-oo	-karoo; -[ru]mai, -umai	-oo	-yoo
Imp	-ro/-0	-e	---	---	---
Pro	-reba	-eba	-kereba	S	---
Inf	-0	-i	-ku; -zu, -azu	---	---
PInd	-ta	-ta, -da	-kaqta	-ta	-ta
PPve	-taroo	-taroo, -daroo	-kaqtaroo	-taroo	-taroo
Cnd	-tara	-tara, -dara	-kaqtara	-tara	-tara[ba]
Alt	-tari	-tari, -dari	-kaqtari	-tari	-tari
Ger	-te	-te, -de	-kute/-kuqte	S	-te

例

tabéru	kasu	nagái	(dá, na, no)	désu
tabeyóo	kasoo	nagakaróo	daróo	desyóo
tabéro/tábe	kase	---	---	---
tabéreba	kaséba	nágakereba	(nára/náraba)	---
tábe	kasi	nágaku	---	---
tábeta	kasita	nágakaqta	dáqta	désita
tábetaroo	kasitaróo	nágakaqtaroo	dáqtaroo	désitaroo
tábetara	kasitára	nágakaqtara	dáqtara	désitara/ désitaraba
tábetari	kasitári	nágakaqtari	dáqtari	désitari
tábeta	kasite	nágakute	(dé)	désite

(表 4)

動詞の活用 (I)

一段活用の動詞 (母音動詞, 弱変化動詞)

tabe	-ru	tabe	-ta	tabe	
oki	-runa	oki	-tara	oki	
	-yoo		-tari		
	-ro		-te		-mas-(u, en)
	-reba		-ta-roo		-ta-(i)
	-na-(i)		-taqte		-nasai
	-sase-(ru)		-te-mo		-nagara
	[-sas-(u)]		-cya		-kata
	-rare-(ru)		-cyaW-(u)		-soo
	-rare-(ru)				-hazime-(ru)

五段活用の動詞 (子音動詞, 強変化動詞)

hanas	-u	hanasi	-ta, -da	hanasi	
maT	-una	maq	-tara, -dara	maci	
tor	-oo	toq	-tari, -dari	tori	-mas-(u, en)
aW	-e	aq	-te, -de	ai	-ta-(i)
kak	-eba	kii	-ta-roo, -da-roo	kaki	-nasai
oyog	-ana-(i)	oyoi	-taqte, -daqte	oyogi	-nagara
sin	-ase-(ru)	siñ	-te-mo, -de-mo	sini	-kata
yom	[-as-(u)]	yoñ	-cya, -zya	yomi	-soo
asob	-are-(ru)	asoñ	-cyaW-(u), -zyaW-(u)	asobi	-hazime-(ru)
	-e-(ru)				

カ変・サ変 (不規則動詞)

ku-ru	ki	ki	su-ru	si	si
ku-runā			su-runā		
ko-yoo			si-yoo		
ko-i			si-ro		
ku-reba			su-reba		
ko-na-(i)			si-na-(i)		
ko-sase(ru)			s-ase-(ru)		
[ko-sas-(u)]			[s-as-(u)]		
ko-rare-(ru)			s-are-(ru)		
ko-rare-(ru)			(deki-ru)		

(表 5)

動詞の活用 (II)

語尾・接尾辞など (前つきのハイフンは語幹の)
(音節, C は語幹末の子音)

一	段	五	段
アクセントの あるもの	アクセントの ないもの	アクセントの あるもの	アクセントの ないもの
←ru	--ru	←Cu	-Cu
←runa	--rúna	←Cuna	-Cúna
--yóo	--yóo	-Cóo	-Cóo
←ro	--ro	←Ce	-Ce
←reba	--réba	←Ceba	-Céba
←ta	--ta	←ta, da	--ta, da
←tara	--tára	←tara, dara	--tára, dára
←tari	--tári	←tari, dari	--tári, dári
←te	--te	←te, de	--te, de
--	--	--	--
←na-	--na-	-Cánai	-Cana
--sasé-	--sase-	-Casé-	-Case-
[--sás-]	[--sas-]	-Cás-	-Cas-
--raré-	--rare-	-Caré-	-Care-
--raré-	--rare-	-Cé-	-Ce-
←taroo	--taróo	←taroo	--taróo
←taqte	--táqte	←taqte	--táqte
←temo	--témo	←temo	--témo
←cya	--cya	←cya, zya	--cya, zya
←cyaW-	--cyaW-	←cyaW-, zyaW-	--cyaW-, zyaW-
--más-	--más-	--más-	--más-
--tá-	--ta-	--tá-	--ta-
--nasái	--nasái	--nasái	--nasái
--nagara	--nagara	--nágara	--nagara
--katá	--kata	--katá	--kata
--sóo	--soo	--sóo	--soo
--hazime-	--hazime	--hazime-	--hazime-
∴	∴	∴	∴